

北原区昔からの言い伝え・格言61

平成23年2月

この「北原区昔から伝わる言い伝え・格言61」は、平成22年3月に(社)飯山市社会福祉協議会から発行された「信州いいやま暮らしの風土記」に記載された事柄について、北原全戸にアンケート調査を行い、北原区でも該当すると答えた方が5割を越えたものを「北原区昔から伝わる言い伝え・格言」として掲載したものです。

なお、ここに記載された内容については、上記「信州いいやま暮らしの風土記」から転写したものです。

No	古くから伝わる言い伝え・格言	あると答えた人の割合(%)
1	初物を食べるときは、東の方を向いていただき、神棚・仏壇に上げてから、みんなで分けて食べるものである。 季節の食べ物を手にした時は、自然に恵みや田畑を拓いてくれた先祖に感謝し、さらにそれを家族中で分け合うという、暮らしの原点を語ってくれている。	80.8
2	冠婚葬祭、人寄せの時には、「典座（てんぞ）と亭主役」がいる。 典座はお勝手元の全てを、亭主役は宴席の進行を取り仕切る役。親戚か近所の男の人がこの役にあたる。	84.6
3	どうろく神で、焼いた餅を食べると風邪を引かない。 1月15日の小正月の夜に「どうろく神」（どんど焼き）が行われる。カヤや稲わら、豆殻などで形づくった円錐形のものがどうろく神で、それに正月飾りやお札などをくくりつけて、一緒に燃やし、家内安全や無病息災お祈る。歳神様がこの煙に乗って、山にお帰りになる。この火で焼いた餅を食べると風邪を引かないと言われている。	96.2
4	ご飯を粗末にすると、目がつぶれる。 昔から米を主食にしていた日本民族は、とりわけ稲や米に対する思い入れが深く、年中行事や祭りになどにもこれに関係するものが多い。「いね」の「い」はいのちのい、「ね」はいのちの根っこの「ね」といい、米には特別の魂が宿っていると考えられていた。	92.3
5	秋茄子は、嫁に食わすな。 秋の茄子は美味しいから嫁に食べさせるのはもったいないという説と、体を冷やすからいけないという説がある。	88.5
6	葬式の時のごちそうでは、大根煮物の面をとらない。酢・人参の赤は使わない。 冠婚葬祭にまつまる食べ物の約束ごとは多い。不祝儀は、急な出来事なので、少しでも急ぐために大根の煮物に面取りはしない。人参の赤はめでたいに通じるため使わないのが決まりだ。	53.8
7	冬至にかぼちゃを食うと中風（ちゅうぶ）にならない。 夏の炎天下で大きくなるかぼちゃには、ビタミンAやCが豊富に含まれている。このことわざは、寒い冬に向かって中風になったり、風邪をひきやすくなる時期に、こうした栄養をとることが大事なことを教えている。	69.2

8	こんにゃくは腹の砂払いをしてくれる。	100.0
	昔の人は経験的にこんにゃくは整腸効果があると知っていた。実際にこんにゃくは食物繊維が豊富であり、特にグルコマンナンという成分は腸内で害のある毒性の物質を少なくし、血糖値の上昇を和らげる働きがある。	
9	りんご、餅、野菜は雪の中に。	57.7
	長い間厳しい冬を過ごす飯山の人々にとって、野菜の貯蔵は命に関わる重要な仕事だ。そのため、貯蔵の仕方にはいくつかの方法がある。庭先にわらでつくった「大根つぐら（大根ぐら）」があり、穴倉の野菜がなくなりかけると、ここから出してきた。	
10	大根食ったら葉っぱ干せ、餅をついたら大根おろしを作っておけ。	65.4
	食材を決して無駄にしない「食べごと」の基本である「一物全体食」の段取りを教えている。大根を食べたときには、葉っぱを干して保存をする。干した葉っぱはお湯などで戻して味噌汁の具にする。また、つくたての餅に大根おろしをつけたものはからみ餅と言われ、非常にさっぱりして消化にもよいと言われている。	
11	味噌と梅干しは古いほど良い。	61.5
	梅干しは伝統的な保存食としても優れた食品で、日常食に欠かせないものだったので、どの屋敷にも一本は梅の木は植えてあった。梅干しに含まれるクエン酸は、カビや細菌などに対する抗菌効果や整腸作用があり、健康を保つのに役立つ。	
12	野沢菜はひと霜あたるとのりが出てうまくなる。	100.0
	野沢菜は霜があたることで、葉が柔らかくなり、甘みが増しておいしくなる。野沢菜の元は、京都の天王寺カブで、江戸時代に野沢温泉の健命寺の和尚が持ち帰って選抜を繰り返し、飯山地方の気象にあった見事な菜が出来た。	
13	ご飯と聞いたら、火事より急げ。	50.0
	現在では家族はバラバラで食事をとることも珍しくなくなったが、昔は家族がそろわなければ食事ははじまらなかった。このことわざは、ご飯の用意ができたなら、急いで食卓につくようと命じたもので、食卓に一人でも遅れると、その他の人の食事ができなくなるぐらい厳しく守られた。こうして、食べ物や炊事をする女衆への感謝の念をあらわしていた。	
14	親が死んでも食休み。	65.4
	食事をしてすぐに動き回ったり、緊張するような仕事をしたりすると、胃腸の消化吸収が悪くなったり、健康によくない。働き者の女衆も含めて、誰もが食後はできるだけ休息をとって、体を安静にするようにと昔は言われた。	
15	川におしっこするとチンチンが曲がる。	57.7
	昔は、まだ水道が整備されていなかった時代には、川の水で鍋、釜、手足、衣類の洗濯のすぎ、また農機具の泥落としなどにも使われていた。それに、春先になると近くの根雪を川水に投げ込んで雪消しにも使った。このように大切な川の水は、川下に住んでいる人たちへの思いやりで使っていた。したがってこのようなことわざが生まれたのあろう。	
16	夜に口笛を吹くと、泥棒が来る。	65.4
	昔の夜はまっ暗でとても静かであった。だから、口笛を吹くと、特に夜は、その音は遠くまで響いてよく聞こえた。今のように夜更かしするようなこともほとんどなく、夜は早かったので、夜の口笛は眠りを妨害したり、驚かしたりして周囲の迷惑になることから、夜の口笛はご法度とされた。	

17	火遊びすると寝小便をする。	84.0
	田畑に野原、山、川と自然あふれる飯山では、子どもたちはの遊び場が沢山あり、子ども達は遊びの達人であった。とはいえ、そこにはタブーとされていたこともあった。これらの言い方は、大事を起こさないよう、子どもの恐怖心をあおりながら危険な行動を事前にいさめたものである。	
18	ざるをかぶると、背が伸びない。	80.8
	米や野菜を洗ったり、まな板で切ったり、鍋や釜で煮炊きをする一連の調理作業で良く使われたのが竹製のざるで、用途によって種類もいろいろであった。当時、竹ざるは高級品で、しかも子どもの遊び道具にすると持ち手が壊れたりするために、子ども達が遊びで勝手にざるを扱うことをきつくいさなめていた。	
19	うそをつくと閻魔さんに舌をぬかれる。	92.3
	「うそつきは泥棒のはじまり」とも言われるが、これも子どものうそつきを厳しくいさなめた言葉である。正直いきることを重んじる飯山の衆にとって、このしつけは地域社会で暮らすうえで最も基本的な心がけで、大切な行動規範であった。	
20	親の意見と冷や酒は後で利く。	57.7
	昔はこどもにとって親の存在は絶対であったが、自意識が芽生えてくる頃にはさすがにその一言一言がうっとうしく思えてくるものである。それでも、時が過ぎ、言われた時はさほど重要に感じられなくても、後々になってから親の言うことが正解であったことに気づいたりする。このように子どものことを大事に想う親の意見は、冷酒と同じで、案外じつくりと利いてくるものだということを言っている。	
21	寝る子は育つ。	100.0
	小さい子どもは良く寝て、良く泣くのが普通で、それを心配したり、とがめたりする必要はない。実際達者な子どもほど、コロコロよく寝るものである。	
22	七つ、八つは憎まれ盛り。	65.4
	すくすくと成長し、七つ、八つになると、急にませたことを言い出したり、憎まれ口をきいたりする。この時期は誰でもそのようなものだ、周りの大人衆に上手に付き合うようにうながす意味もあるのであろう。	
23	親を見たけりゃ、子を見ろ。	57.7
	「子は親の鑑」ともいわれ、親の子育ての結果が子どもの性格や行動に反映していること言う。人間形成にとって、子育ての仕方が大事なことを言っているともいえよう。	
24	女の子が生まれたら、桐の木を一本植えろ。	65.4
	娘が嫁に行く際には、嫁入り道具を準備したり、婚礼に大勢の客を招いたりするので、とても大金がかかった。だから、高級な桐タンスを買うお金が必要ないようにと、生まれた子供が嫁にいく時のために、タンスの材となる桐の木を屋敷内に植えておくようにすすめたものである。	
25	銭取りあんべ、死にあんべ。	80.8
	「あんべ」とは「塩梅（あんばい）」のことで、具合とか加減を意味する。このことわざは、「金を稼ぐということは死ぬほど苦勞なことだなあ」という意味になる。	
26	口と財布はしめるが得。	53.8
	余計でつまらないおしゃべりをしないように、またお金の無駄使いをしないようにいさめた言葉である。	

27	<p>銭金他人（ぜにかねたにん）。 73.1</p> <p>お金の貸し借りのことは、親子・夫婦といえども、きちんとしておくことが必要で、また、他人ならば、良好な人間関係を保つために不可欠な条件となる。</p>
28	<p>ひとつ年上の嫁さんは、金のわらじを履いても探せ。 80.8</p> <p>夫婦の相性は一つ違いの姉さん女房が良いとされている。年上の女房は、母性本能によって優しく、暖かく包んでくれて、家庭が円満にいくといういことである。</p>
29	<p>婿取り三代続けば蔵が建つ。娘三人いればしんしょがつぶれる。 80.8</p> <p>婿取りの家では、お婿さんは家の衆や近所に認められようと働き者が多かった。これが三代続くと、大きな財産をつくることも多かったのであろう。一方、嫁がいる家では、嫁入り支度に大きなお金がかかることから、その負担は大変であったろう。</p>
30	<p>遠い親戚より近くの他人。 88.5</p> <p>いざという時には、遠くの親戚より、近くのにいる近所さんの方が頼りになる。したがって、普段からの近所付き合いが大事である。とくに、雪国の飯山での暮らしでは、ご近所の関係がとても重要であった。</p>
31	<p>米の飯とお天道さんはどこでもついてまわる。 61.5</p> <p>どんなに大変な状況になっても、食べ物とお天道さんだけは、どんな人にも与えられる。苦勞や不運なことが続く時、励まし元気づける言葉のひとつである。</p>
32	<p>段取り八分、ずく次第。 50.0</p> <p>何事も成就するためには段取りが大事である。それがうまくいけば八分どおり終わったも同然だ。あとは、ずく（氣力）を出すかどうかでことの成就が決まる。</p>
33	<p>飯山時間（寄り合いの時間に30分程度遅れる） 50.0</p> <p>飯山の衆は相手を思いやる優しさを持っている。訪問するときも、訪問先の人があわてないようと、たいていは30分ほど遅れていくのが普通で、それが思いやりだと言われていた。昔は、村の寄り合いなどでよく使われた言葉だ。</p>
34	<p>妊婦の腹帯は戌（いぬ）の日に。 76.9</p> <p>「腹帯」というのはお腹を冷やさないため、またふくらみ始めたお腹を支えるためにつける木綿のさらしので、妊娠五ヶ月目の最初の戌の日につけるのが一般的だ。なぜ、戌の日かというと、犬は多産でお産が軽いので、昔から安産の守り神としてあつかわれていたからであろう。</p>
35	<p>四角の部屋を丸く掃く。 53.8</p> <p>三世代以上が同居していた昔の大家族の家は、大きな平屋が多かった。このことわざは、室内の掃き掃除の時の掃き方を比喻した言い方で、四角い部屋をいい加減に丸く掃くと隅にゴミが残ることと言っている。何事もいい加減にやらずに、しっかりとやりなさいという意味で使われていた。</p>
36	<p>実家が近いと七つの得。 57.7</p> <p>初めての子どもは実家で産むのが習慣で、出産の一ヶ月ぐらいには「赤ちゃん産み」に実家に帰った。実家が近くにあると、このように日常的にいろいろと相談することができた。お米やお金を借りたり、いろいろとわからないことを聞いたり、七つは得なことがあると言う意味である。</p>

37	大雪の時は、「ぐし」を割って、軒を切っておけば家はつぶれない。	65.4
	雪には、その重さの他に粘性があり、両端同士でお互いに引っ張る力が働く。また、屋根の両側の傾斜に向けて引く力がなくなる。これをしないで実際につぶれた落ちた家が実際にある。大雪の飯山には欠かせない、家と生命を守る智慧ともいえる。	
38	藁をたたく時は、まわしてたたけ。	57.7
	雪深い飯山において、藁細工は冬場の大きな収入源であった。縄や草履、ネコ、ゴザ、ミノなどをつくる材料となる稲藁は、土間で定部石（じょうべいし）の上で木槌でたたいて程良い柔らかさにする。同じ場所をたたいていると藁が切れてしまうので、回しながら全体をたたくのがコツであった。	
39	ツバメの巣づくりがある家は福が来る。	80.8
	ツバメが巣作りに来る家は、毎年ほぼ決まっていたりするが、そこが天敵から身を守ることができる安全な場所であることを知っているのであろう。縁起がいいので、ツバメの巣を取ってはいけないと言われている。	
40	苦しい時の神頼み。	96.2
	飯山は寺町なので、人々は信心深い。そんな町であっても、信心の足りない人はいるものである。日頃は信仰に無関心なのに、いざ困った時が来ると、にわかに神に助けを求めて寄進したり、社寺に出かけて祈願したりして願いごとを叶えようとする。このような人たちの行動を比喻して使われたのが、このことわざである。	
41	蛇の抜け殻を財布に入れておくと、お金が入る。	50.0
	ここでいう蛇はマムシのことで、飯山でもよく見かける。日本のほぼ全域に分布する日本固有に毒蛇で、黒褐色または茶褐色で銭形をした二十対ほどの模様を持つ。他の蛇に比べると胴が太く、頭部が三角形に近い。	
42	棚からぼたもち。	88.5
	昔は甘いものはかなり貴重であった。特にぼたもちはごちそうとしてあつかわれ、お盆やお彼岸のほか、大切なお客さんをもてなす時でなければ食べられなかった。だから、ぼたもちにありつけることは、幸運なことであった。このことわざは、そんな幸運に出会えたことを、偶然棚からおちてくるぼたもちに喩えて言ったものである。	
43	もらい物をしたら仏壇に一番に供える。	84.6
	飯山の衆は信心深いと言われる。家の仏壇に祀る仏様やご先祖様には毎日手を合わせることを欠かせないだけでなく、毎日ご飯を炊くと真っ先に仏壇に供えた。このように、飯山の衆にとって、仏様やご先祖様は常に家族とともにある大切な存在で、家族が食べ物をいたく前に真っ先に供えるのが通例であった。	
44	歯が抜けた時、下の歯は屋根に、上の歯は縁の下に捨てる。	92.3
	乳歯が抜けた時には、次ぎに良い永久歯が生えてくるようにと、下の歯は屋根に、上の歯は縁の下に投げ入れた。これは、上の歯は下に向かって、下の歯は上に向かってすくすくと伸びていくようにという願いからである。	

45	6月4日の宵節句に菖蒲またはヨモギを入れた湯に浸かると、蛇に噛まれない。	84.6
	6月4日とは、旧暦で端午の節句の日にあたる。飯山ではこの日、魔除けとして軒先に菖蒲とヨモギを吊す習慣があった。これは、菖蒲もヨモギの葉も匂いが強いので、魔物が寄りつかないということから来ていると想われる。それと同時に、菖蒲湯やヨモギ湯に浸かるとその臭いが体につき、田畑や山で作業をする時にヘビをよせつけないと言われた。	
46	カラスの鳴きが悪いと死人が出る。その家の人には聞こえない。	88.5
	人間の精神状態は、以外に気候などの自然状態に影響されるところが大きい。また、医学に発達していなかった頃、昏睡状態にある人や呼吸困難に陥った人にとって、気圧の低い時間帯は危険な時間であった。そのため、亡くある人もすくなくなかった。一方、カラスは、気圧が低くなる時間帯によく鳴く鳥と言われる。そのため、人の臨終の瞬間や急遽駆けつけた僧侶の読経に、カラスの鳴き声が重なるようなことも少なくなかった。そんな事例の積み重ねによって、「カラスの鳴き方がいつもと違っていて悪かったりすると、死人が出る」と言われはじめたのであろう。また、病人を抱えた家の人あまり外に出ないので、そんなカラスの不吉な声も聞こえなかったのであろう。	
47	出る前の爪切り、夜の爪切りは親の死に目に会えない。	84.6
	夜、爪を切ったからといって、実際の親の死に目に会えないということはないだろうが、「夜爪」が、「世を詰める」に通じるので、不吉とされ嫌われていた。そして、出かける前に爪を切る「出爪」は、金が出ていったり、出先で恥じをかいったりすることになるからといって、もっと不吉なこととされた。もっとも、夜の暗い中の爪切りや、出かけにあわてて爪を切るとケガをしやすいという意味もあったであろう。	
48	書き初めの燃えさしが高くなるほど、字が上手になる。	69.2
	一月十五日の小正月の夜には、道祖神（どんろく神：どんど焼き）が行われる。この日は、家々を回って、正月のしめ飾りや松飾りなどを集めて燃やした。その歳に、正月に神棚などに飾った書き初めと一緒に燃やした。その燃えさしが高く上がるほど。「手が上がる」ということで、字が上手くなるとされている。また、柳の枝に刺した繭玉をその火で焼いて食べると風邪をひきにくくなるといわれている。	
49	節分にまいた豆を年の数だけ食べると病気にならない。	92.3
	節分は、旧暦では元旦の前日（大晦日）のことであるが、この日には新年を迎えるにあたって邪気を払うために食べるものに気がついた。豆まきに使った「」った豆は、「福豆」と呼ばれ、食べることで邪気を払い、病に勝つ力がつくと考えられており、たいていは自分の歳の数だけ食べるのが習わしであった。	
50	初午の早い年は火事が多い。	57.7
	二月最初の午（馬）の日を「初午」といい、全国的に様々なお祭りや習わしが行われる。この時期は乾燥して火事の起こしやすい時期であり、このような言い伝えは全国的に見られるようである。馬は火を見るとあばれるので、そのように言われたのであろう。	
51	お盆の最中は生き物を殺生してはいけない。	50.0
	お盆の最中は、生きものを殺してはいけないとして、生きとし行けるものへの畏怖と感謝を教えられた。お盆は祖先の霊が帰ってくる期間であり、その霊が虫などの身近な生きものに姿を変えて訪れてくれているかもしれないという理由で説明されたものである。	

52	坊さんやその家にとって大事なお客さんは、座敷から入る。	65.4
	座敷は家の中で一番良い和室なので、特別な人には、直接座敷から上がってもらえるように縁側から上がってもらった。座敷の前に置かれた長い石はそのためである。飯山は寺町なので、婚礼も仏式が多かった。昔は婚礼もそれぞれ家で行うのが普通で、婚礼を取り持つお坊さんには、座敷から上がってもらった。	
53	里山に3回雪が降ると、里にくる。	88.5
	雪の深い飯山では、冬に向けての段取りが欠かせなかった。その中で、里に雪が降る時期を予測することも、冬を迎える飯山の衆にとって、何よりも大切なことであった。その場合、どこの集落でも地元で親しまれている山を基準にすることが多かった。どこの集落も近くに見える山に雪が三回降るのを、里に初雪が降る目安としていた。	
54	カマキリの巣が高いところにあれば、雪が多い。	96.2
	天候や季節、雨量や雪量の予測に関しては、身近にいる動物の行動から判断することが多かった。カマキリや地バチなどのこうした産卵行動も、生き残るための本能として行われていることが知られている。	
55	夕焼けがきれいだと翌日は晴れる。	92.3
	夕焼けは晴れのしるしだとよく言われている。先人の長年の経験の中から生まれたものだろうが、根拠のある言い伝えである。夕焼けは西に雲がなく、水蒸気が少ないという条件で起きる。日本では偏西風の関係で、西の方の天気は東に伝わる人が多いので、夕焼けが晴れのきざしになることが多いといえよう。	
56	雪降ろし（冬雷）が鳴ると大雪になる。	92.3
	「雪降ろし」という言葉は、冬の雷を表す飯山共通の言い方で、主に一月下旬～二月ごろに聞かれる（北陸地方でも冬の雷のことを「雪起こしの雷」や「雪降ろしの雷」と呼んでいる）。日本海側の気候では、冬の雷は日本海を通過する寒気が大気を乱して、積乱雲が急速に発生すると鳴りやすくなり、雨や雪を必ずといってよいほど降らせる。	
57	ハッコウ鳥（山鳥）が鳴いたら、豆をまけ。	50.0
	春になると近くの山ではハッコウ鳥（山鳥）が盛んに鳴り始める。このハッコウ鳥とはカッコウのことである。「ハッコウ、ハッコウ（カッコウ、カッコウ）」という鳴き声が名前になった鳥で、高原や明るい林、草地に住む。この鳥が鳴く頃が豆を蒔くのに適した時期になると言われている。昔は親が忙しく畠に豆を蒔いていると、その後をこどもたちは、山鳥を真似て「ハッコウ、ハッコウ」（早く来い）と声を出しながらついて歩いたものだ。	
58	七月にナスを植えると、お斉ナスになる。	61.5
	飯山は秋が来るのが早いので、早めにナスを植えないと秋ナスの時期によいものが収穫できない。長年の経験からすると、遅くとも六月中にはナス苗を植えるようにとのことをこの言い伝えは語っている。	
59	ジャガイモの後にダイコンをまけ。	50.0
	ジャガイモは冷害に強く、作りやすい作物で、一年中貯蔵が利く。そのため冬場に雪の多い飯山では貴重な野菜として、どこの家でも自家用にたくさん作っていた。雪解けの春一番に種イモを植えて、八月初旬からお盆頃に土を深く掘って収穫する作物である。収穫後に、堆肥など土壌改良のできる資材を入れて土地づくりをし、九月に入ってから少し涼しくなってからダイコンを蒔くと、冬場によいものが収穫できると言われている。	

60	<p>ジャガイモを作った場所に翌年ナスを植えるとできが悪い。</p> <p>同じ作物や同じ科の作物を同じ場所で栽培を続けると土のバランスがくずれ、単に生育が悪くなるだけでなく、病害も発生しやすくなる。特にナス科の作物（ジャガイモ、ナス、トマト、シシトウトウガラシ）は連作に弱いので、同じ場所での連続栽培は避けたいところ。他にも、ウリ科（キュウリ、スイカなど）やマメ科（エダマメやインゲンマメなど）、アブラナ科（ハクサイやキャベツ、ダイコンなど）の作物も連作に弱い。</p>	53.8
61	<p>豆類のクズや古い豆類の芽を殺して煮てまくと肥料の基肥になる。</p> <p>豆類には豊富な植物性たんぱく質が含まれていることから、古くから窒素肥料として利用されてきた。とくに食用にできないようなクズ豆や発芽して食べられないような豆が使われた。大豆から油を絞ったあとの粕も有機肥料として使用されるが、こうした豆類を利用した有機肥料は一般に肥効の出るのは遅いが、長く続くので、肥料切れも少なく済むということで、基肥としてはだいぶ重宝されたものだった。</p>	50.0